

G O Z O ノート 2

航海日誌

吉増剛造

慶應義塾大学出版会

惑星に水の木が立つ

gozo, yoshimasu

こんな過去にはもう戻らない

初湯、雨の木、死水

水の奥に“萌”という女が住んでいて

い、え、折レルようにして立ち上ル

誰もみたことのない“多岐”という少女がそのまた奥ニ、マタ、
立ち上ル、立ち上ル

清瀧のようニ、樹木のようニ

わたくし

ハ

水ノ運命ノ声ヲ聞ク

ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ

2016. 1. 20 P.M. 4:25 Nazomi フプキの関ヶ原付近デ。

G
O
Z
O
ノ
ー
ト

2

航
海
日
誌

目
次

「ニューヨークの郊外電車の笛がどこか向うで響いた。

そのほかは静かであった。」 7

(ロスアンジェルス) 土間に坐っていた 10

阿佐ヶ谷の谷川さんの家へ 14

遊ぶ 24

天草から島原へ 26

アメリカ幻想紀行 27

アメリカは遠い国だ 35

イイヨシさんの鍵 40

石狩、*i*町 43

(伊勢参り) 47

一步外に歩み出す時 57

いまでも世田谷迷路という 62

インドにはじめて 71

裏日本へ 76

沖縄の巨樹 78

小田急に乗って何処へゆく?

81

小樽、オタルナイ 84

航海日誌 98

コドク 114

三陸沖 118

三陸沖に海上風警報が出ています 121

静かなアイerland 137

詩の発生する場所をもとめて——螺旋階段と霊の部屋 140

新古今の葉裏にあるく 159

数日前、通勤時の新宿駅構内 165

スコットランド紀行 169

奥から舟が、蕪村の舟が 176

それをすみだ河といふ 181

旅、頭脳の 191

透谷の「三日幻境」など 198

遠野 209

ときおり福生の実家に帰るとき 211

なんという深い路地の彩りだ 216

羽の舞舞はま 218

月裏の声 222

「どこへ行っても土を掘り」 225

日日、白日 229

深い泥濘ぬかるみの場所 231

不思議な佳い町 236

ブラジル紀行 240

ブラッサイ、未知のパリ、深夜のパリ 247

星をさがして裏町を 249

窓、西の窓でも北窓でもよい 257

螺旋階段を登ってゆく——透谷ノート 262

若い友への手紙 278

解説 天窓にむかって、詩人の名を呼んでみる 長野まゆみ 283

吉増剛造 著書目録 297

G
O
Z
O
ノ
ー
ト

2

航
海
日
誌

「ニューヨークの郊外電車の笛がどこか向うで響いた。そのほかは静かであった。」

「ニューヨークの郊外電車の笛がどこか向うで響いた。
そのほかは静かであった。」

ニューヨークの郊外電車の笛がどこか向うで響いた。そのほかは静かであった*。

電信柱どもは本線の方も、軽便鉄道の方もまるで気が気でなく……独楽のようになつており
ました。それでも空はまっ青に晴れておりました*。

「郊外電車」は、何処か、フシギな方向からやって、来ていた。こうして、少し笛の響きを古く
して、線路のひかりを、柔かく遠くして、「郊外電車」を浮かべてみる。ひかりが姿をあらわす。

(その夢の方へ

行く、)

(緑の名もないやまも、

computerも根を澄ましてらん

木造小学校庭にひかりが入って来た時

桜は震えた

櫻は泣いた

(ぼつぼつと行く後影、

誰れだ誰れだ、おいお這入りよ*)

入って来て、空根を啼きながら、木の家から出て行った。言葉にさそわれて、朝も四時前、家を出て家を眺めると、恨むがごとく、木や台を傾けている。家が家を出て、遊星の何処か、元の住いに戻って行くのを、言葉が見送っていると、わたしの棚の草葉は語る。「權」が入って来て、空根を啼きながら、空根をむせび泣き、遥か彼方で隕石がぶつかり合う音がした。

(緑の名もないやまも、

computerも根を澄ましてらん

「郊外電車」は、何処か、フシギな方向からやって、来ていた。こうして、少し笛の響きを古く

「ニューヨークの郊外電車の笛がどこか向うで響いた。そのほかは静かであった。」

して、線路のひかりを、柔かく遠くして、「郊外電車」を浮かべてみる。ひかりが姿をあらわす。

電信柱どもは本線の方も、軽便鉄道の方もまるで気が気でなく……独楽のようになっ
ておりました。それでも空はまっ青に晴れておりました。

ニューヨークの郊外電車の笛がどこか向うで響いた。そのほかは静かであった。

*カフカ *賢治 *一葉

〔巻拾壱〕第壱拾号、一九八三年九月〕

(ロスアンジェルス) 土間に坐っていた

パーティーなら三倍も四倍も明るく騒々しいはずなのに、入って行ったときには、あれここは納屋のようだなと感じていた。あかりが普通よりやや暗くてやってきた人の幾人か、三、四人が古びた長椅子や土間(といっても敷物の上)に腰をおろしていて、これは奇妙だ古くさいなと感じてその瞬間に、ここは納屋のようだという印象が生じていた。

集会に無理矢理に私をつれてきた女房に聞くと、ガレージを改造したらしいわよという。ガレージというと金属の感じやらガスの匂いなんかが残っていきそうなものだがそうではない。枯草の匂いがして背後の暗闇で大きな動物でもうごいているようで、馬小屋の印象もある。

夕刻七時頃、老婦人や若い男が多いような気がしたが黒人はいない。三十人か三十五人位かがおもいおもいにソファアに坐ったり、土間に腰をおろしたりして集会ははじまった。

このスピリットとかミディアムという霊媒さんのところにつれて行かれたのは、いま日記をくつてみると五月十三日のことだから約一カ月半ほどたっているが、こうして書きつつ記憶が匂いの塊りのようになりつつあるような気がする。

「記憶が匂いの塊りのようになり」と書いたが、そのスピリットとかミディアムとか呼ばれる霊媒さんの集会で感じたもの、あるいはあらわれたものには不思議な色や艶、香りがあった。アメリカ西海岸ではこうしたスピリットとかミディアムの集会に出る人々も多いという。

そのガレージを改造した、そう一戸建なので納屋や馬小屋のような感じをあたえるのかも知れないところで集会がはじまったのだが、来月の何日にはテレビ出演をするとか、メキシコにも行くという話をしていて、やがてその中年のウィリアム氏の声にドクター・ピールが入った。他人の声に別の人の声が突然入る、といういい方が正確だとも思う。落着いた中年男の声がやや強く出てくる金切声と入れかわる。これはたとえば物真似や腹話術の人たちの声の入れかえに近いだろう。

声として入ってきたドクター・ピールは、この集会に毎週出席している女房の説明によると、スコットランド生れのお医者さんで、サンフランシスコ大地震でなくなった方だという。そういえば金切声の英語にちょっと田舎ぽいなまりのあるのが私にも判る。金切声だが声の調子にユーモアというか愛嬌がある。しかし声が聞こえはじめて十分か十五分位は、これは私だけに起ったのか判らないが、頭痛や耳鳴りを感じずるほどで、耐えがたい時間がすぎる。その声に慣れてしまつて頭痛や耳鳴りがしずまるのではなくて、やがて質問がはじまり対話になり、日頃聞きなれた英語が入りまじつて、次第にその場の(耳目の)バランスがとれてくるのだった。

その日の集会にきた人たちが、次々にスコットランド生れのドクター・ピールに質問をする

のだが、その内容は日常的なものが多い。ほとんどが日常的といおうか実際のなというか、たとえばある女性はどうすぐ莫大な税金の追徴金がかかるがどうしたらよいかと聞いていた。あるいは職がしのこと。共同経営者と関係がうまくゆかぬがどうしたらよいかと中年すぎらしい男性が聞いた。ほかの人はどんな姿勢で聞いていたのかわからないが、私は瞑目してひぎの間にあたまをつけるようにして土間に坐っていた。そういえばこんな聞き方、身体の置き方には覚えがある。薄暗いトーキョーの片隅のジャズ喫茶、土間に似たアスファルトの触覚が甦るようだ。考えてみるとほとんどの人達は（三十人か四十人中東洋人は一人だったが）対話を楽しみにきていたのかも知れない。

頭ごしに若い男の声で、どうもこの頃髪の毛が脱げるようで気になるのですがという質問があった。これはスピリットさんも大変だな、脱毛の相談にもものつてやらなきゃならんのかと同情していたら、ドクター・ピールはこんな質問に答えるのは得意らしい。お医者さんだったのだ。曰く、山羊の乳、ポテトを多くとること、頭皮をよくマッサージして、ときに逆立ちをすることとりわけ山羊の乳はよいはず、山羊の乳、ポテト、お判りかな？ 神のお恵みを。……なるほど、……なるほど。

こうして切れ目なしに質問がつづいて、ときに爆笑も湧く。ドクター・ピールは数字が苦手なのだ。質問者がそれをひやかす。頭上を通って行く異国の言葉を少しづつとらえながら幾つかの発見があった。瞑目してこちらでも精神集中をして聞いているために、彼（ら）が質問者の声の

色や艶、勢いやリズムを手がかりにして答えようとしていることが読みとれる。あるいは聞きとれる。質問者の呼吸、言語構成の長短その調子によって、質問者のかたち、みえない肉体を読みとる。こうした呼吸や音の色や艶には別段おどろくこともなかったのだが、山羊の乳やポテトのところだったろうか、あるいは彼の声がどこか懐かしいしゃがれた田舎のおじさんのように聞こえだした頃だったろうか、どこからか遠い光景と香りが近づいてきた。似たような経験を私はアメリカでしている。短い紀行文を書いて、東北地方の畔道よりやや大きな田舎道を想いだしたとき、なぜだろう突然鶏糞の匂いがしてきた。

その人のスコットランドなまりのせいなのだろう、異臭がまじった。乾草に山羊、バターやポテトが積まれた荷車か納屋がみえたようにおもっていた。キリストの生れたところというのは、あるいはこんな匂いのしたところかとおもっていた。

〔文藝〕一九八〇年八月号

阿佐ヶ谷の谷川さんの家へ

阿佐ヶ谷の谷川さんの家へ、そう、昔はここに草原があつて白い気球がぼっかり浮かんでいた。零歳から四歳くらいまでぼくはここに住んでいて戦争前夜の空気を呼吸していた。不思議な折れ曲りかたをしている杉並横丁を歩いて天沼のほうへゆくが、昔の家はみつからない。高架線の川となつた中央線の、彼岸むこうと此岸こっち。

はるか彼岸の松の木のように立っている谷川俊太郎宅をさがして漂泊する。途中で不思議な他界への窓口のようなパチンコ台の、釘の林を漂泊つて……。武蔵野の幻を織るように……。

阿佐ヶ谷の谷川俊太郎宅へ二、三度行ったことがある。正確には美術雑誌「三彩」の編集者だつた頃、隣りにある谷川徹三氏のところに原稿を受けとるために行ったのが最初で、そのときもわたしは道に迷つた。谷川さんの家附近は奇妙ないりくみかたをしていて、道に迷うと谷川宅を巻くようにしてさまようことになる。地下鉄南阿佐ヶ谷から青梅街道をやや新宿よりもどつて右に折れ、ゆるい坂をくだつてゆく少し低地のようなところに谷川さんのひらたい感じの木造の

家がある。地形のせいだろうか、この辺の裏を走る旧街道の五日市街道のせいだろうか、道が奇妙に枝分かれしていて迷うらしい。あたりには樹木も多くわたしは谷川さんのところにゆこうとして木立にそった細道を何度かゆききして迷ったときの印象がつよい。わたしは方向感覚がわるいほうではない。しかし世田谷迷路と似た杉並迷路でもあるのかどうも変な迷い道が谷川さんの家のあたりにある。こうして書いてみようといつものように強引におもいさだめて、新宿から「ゴウオウオウオと地下鉄がやってきて」（谷川俊太郎）それによって南阿佐ヶ谷へやってきた。

じつは前日も国電で阿佐ヶ谷駅までやってきていて、迷路とまではいえなけれど、なにかありげな谷川邸あたりまで歩こうとしていたが、幼年の記憶にひかれて谷川さんの家のある南口成田東方面とは反対側の天沼方面へ足がむいてしまっていた。というのは零歳から四歳くらいまでわたしも阿佐ヶ谷六丁目、天沼に近いほうに住んでいても昔の家はあるかないか判らないが、そこへ行ってみたくなつたのだ。阿佐ヶ谷には広い原っぱがあつて気象台から白い気球がポカんと浮かんでいた。いまでもその気球がわたしの頭に浮かんでいるのである。原っぱを歩いて高円寺まで歩いたりしたことをおもいだしていた。こちら側にも奇妙にくねる道があつてゆるい坂を下る。下りつつ「アッ」と叫ぶように弟ののった乳母車を坂道に突きはなしたことをおもいだしていた。記憶のなかに道の印象がよみがえってきたのか、足がそれをよみがえらせたのか。一時間ほどさまよい歩いて結局昔の家はみつからず、阿佐ヶ谷駅へ戻る途中の天祖神社の樹木の影ではじめてわたしは自分の昔の記憶にであつた。壁とおおいかぶさる樹木の下の道のところでわた

しは記憶のなかの翳りのような場所に入った。これはまずいな、神社の影のところなんて……。

町に

かくされた小みちがある

折れ曲り

折れ曲り

みちはいつか

小暗いかまどの中へ

消えている

もとはと云えば

にぎやかな通りから来た

みちであったが

かれがれの野をすぎて

他国から来た

みちであったが

その小みち

狂人は

ふり返り

行きつ戻りつ

その小みち

盗賊は

追われ追われて

その小みち

石はだんまり

聖ひじりはいずこ

その小みち

二種原付の

パタパタ

(谷川俊太郎「横丁」、詩集『うつむく青年』より)

どうしてかこの「追われ追われて、パタパタ、小みち」のこの詩がわたしは好きで、スクーターのあとだったか先であったか、この「パタパタ」にアツという間に消えた「キャブ」なんて名

の原付自転車の、なんだか精霊的な声の響くのを聞くようである。地下鉄の穴のなか「ゴワオワオワオ」例によって空気の押しあいへしあいみたいなのも凄いけど、この「パタパタ」も凄いんだ。

花籠部屋のオスモウさんも自転車にのって曲ってくる。横丁でウロウロしていると、背後から女の子の囁くような悪口みたいなのが聞えてくる。「日雇いの人ね」と、声を残して杉並横丁の奥の谷川さんの家のほうへ自転車ののって消えてゆく。女子中学生の二人づれらしい。わたしは二千円の安ジャンパーを着ているのである。クソッ、そんな悪口いつてるといつか少女誘拐してやるからな。でもこのあたりの杉並横丁は汚れたモルタル壁の亡霊も一ケくらいにじみだしてくる壁はないな。それにしても「日雇いさん」なら陽焼してるはずなんだが、馬鹿にしてる。ふり返るとまた自転車がくる。原付の精霊的なじゃなくて、ライトもついてないし太腿もみえないじゃないか。これじゃあだめだ、いくら白い貌の日雇いさんでも。

街道の彼岸むこうと此岸こゝち。橋があつたり、不思議な鏡が角に吊られていたりして、変な風景がみえる。鏡にタバコ屋も電車もうつっているようで、角の鏡からアリスみたいな少女が覗いてるような気がする。悪口なんかいわない可愛らしい西洋人形みたいな少女が……。

中央線の天沼側で一日は暮れた。谷川さんの方の彼岸あっちにはその日はゆけず。中央線も一筋の川とすると、彼岸むこう側の五日市街道のほうへゆくまえに記憶のなかの古い「小みち」を「谷川ある

き」の予行演習でもするようにわたしは歩いた。阿佐ヶ谷駅ガードを南口に出て天ぶら定食をたべ、アレンジゲーム（パチンコの新種）で千五百円ほどすって一日が暮れた。翌日新宿から「ゴワオワオワオと地下鉄がやってきて」昔は都電が走っていた青梅街道の下を辿って南阿佐ヶ谷へやってきた。地図はなし。谷川さんの御招待もなし。自分で「谷川あるき」と名付けているだけ。カメラと夏用の白いポストンバッグをもって。いや「地図」はこの詩。

煙草屋の角を右へ折れて下さい

足の悪い男の子が走ってゆきます

枯れかかった檜の木の下の通ると

ふと前世の記憶が戻ってくるかもしれない

道なりにゆるく小学校のほうに曲って

（老人同志云い争う声が聞えるでしょうか）

訳もなく立ち止ってもいいんですよ

その時すれちがった一人の若い女の不幸に

あなたは一生立ちいる事ができないのです

でも口笛を吹いて下さって結構です

風がパン工場の匂いを運んできたなら

十字路は気がむいたら左折して

ちよつとつまずいたりして石塀にそつて

仕方なく歩いてくると表札が出ています

私はぼんやり煙草をふかしているでしょう

何のお話をしましょうか番茶をすすつて

それともあなたは私の家を通り過ぎて

港のほうまでいらつしやるのですか（谷川俊太郎「道順」、詩集『空に小鳥がいなくなった日』より）

やっぱり十分ほど迷つて谷川家を巻くようにして杉並横丁の一隅谷川邸に出た。一人で記念撮影をしてると、^(大)^(大)^(大)の登録標が四つもみえて、あれ四匹もおもつていると扉のすきまから眼が四つ覗いている。あれ！ おれより薄気味悪いや。それで悠然と望遠レンズをとりだして彼らとぼくの白バッグで記念撮影なのである。

ポエムアイ！ 愛とやさしき、こつけない義務！ こう

して私は、世界の謎々あそびに加わることになってしま

った。

（谷川俊太郎「ポエムアイ」、詩集『21』より）